

たけくらべ

樋口一葉

青空文庫

(一)

まわ 廻れば 大門の見返り柳いと長けれど、お齒ぐる溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取る
 ごと、如く、明けくれなしの車の行來にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は
 ほとけ 佛くさけれど、さりとは陽氣の町と住みたる人の申き、三島神社の角をまがりてよりは
 れぞと見ゆる大厦もなく、かたぶく軒端の十軒長屋二十軒長屋、商ひはかつふつ利かぬ處
 とて半さしたる雨戸の外に、あやしき形に紙を切りなして、胡粉ぬりくり彩色のある田
 んがく 樂みるやう、裏にはりたる串のさまをかき、一軒ならず二軒ならず、朝日に干して夕
 ふひ 日に仕舞ふ手當こと／＼しく、一家内これにかゝりて夫れは何ぞと問ふに、知らずや霜
 もつぎとり 月西の日例の神社に欲深様のかつき給ふ是れぞ熊手の下ごしらへといふ、正月
 かどまつ 門松とりすつるよりかゝりて、一年うち通しの夫れは誠の商賣人、片手わざにも夏
 てあし より手足を色どりて、新年着の支度もこれをば當てぞかし、南無や大鳥大明神、買ふ
 ひと 人にさへ大福をあたへ給へば製造もとの我等萬倍の利益をと人ごとに言ふめれど、
 おも さりとと思ひのほかなるもの、此あたりに大長者のうわさも聞かざりき、住む人の多

くは廊者にて良人は小格子の何とやら、下足札そろへてがらんがらんの音もいそが
 しや夕暮より羽織引かけて立出れば、うしろに切火打かくる女房の顔もこれが見
 納めか十人ぎりの側杖無理情死のしそね、恨みはかゝる身のはて危ふく、すはと言は
 命がけの勤めに遊山らしく見ゆるもをかし、娘は大籬の下新造とやら、七軒の何屋
 が客廻しとやら、提燈さげてちよこちよこ走りの修業、卒業して何にかなる、
 とかくは檜舞臺と見たつるもをかしからずや、垢ぬけのせし三十あまりの年増、小ぎつ
 ぱりとせし唐棧ぞろひに紺足袋はきて、雪駄ちやらく忙がしげに横抱きの小包はと
 はでもしるし、茶屋が棧橋とんと沙汰して、廻り遠や此處からあげまする、誂へ物の仕
 事やさんと此あたりには言ふぞかし、一體の風俗よそと變りて女子の後帯きちんと
 せし人少なく、がらを好みて巾廣の巻帯、年増はまだよし、十五六の小癩なるが酸
 漿ふくんで此姿はと目をふさぐ人もあるべし、所が是非もなや、昨日河岸店に何
 紫の源氏名耳に残れど、けふは地廻りの吉と手馴れぬ焼鳥の夜店を出して、身代た、
 き骨になれば再び古菓への内儀姿、どこやら素人よりは見よげに覺えて、これに染
 まらぬ子供もなし、秋は九月仁和賀の頃の大路を見給へ、さりとは宜くも學びし露八が物
 眞似、榮喜が處作、孟子の母やおどろかん上達の速やかさ、うまいと褒められて今宵

も一廻りまわと生意氣なまいきは七つ八つよりつりて、やがては肩かたに置手おきてぬぐひ、鼻歌はなうたのそゝり節ぶし、
 十五の少年せうねんがませかた恐ろし、學校がくかうの唱歌しようかにもぎつちよんちよんと拍子ひやうしを取りて、
 運動會うんどくわいに木きやり音頭おんどもなしかねまじき風情ふぜい、さらでも教きやう育いくはむづかしきに教師きやうし
 の苦心くしんさこそと思はるゝ入谷いりやぢかくに育英舍いくえいしやとて、私立しりつなれども生徒せいとの數かずは千人近く、
 狭せまき校舎かうしやに目白押めじろおしの窮きうくつ屈くつさも教師きやうしが人望じんぼういよくあらはれて、唯ただ學校がくかうと一ト口くち
 にて此このあたりには吞込みのみこのつくほど成るながあり、通ふ子供かよこどもの數かず々くに或あるは火消ひけし鳶とび人足にんそく、
 おとつさんは勿橋はねばしの番屋ばんやに居ゐるよと習ならはずして知しる其道そのみちのかしこき、梯子はしごのりのまね
 びにアレしの忍しのびがへしを折おりりましたと訴うつたへのつべこべ、三百びやくといふ代言だいげんの子こもあるべし、
 お前の父まへととさんは馬うまだねへと言いはれて、名なのりや愁つらき子こ心こころにも顔かほあからめるしほらしさ、
 出入でいりの貸座敷いゑの祕藏ひざう息子むすこ寮りやう住居ずまひに華族くわぞくさまを氣取きどりて、ふさ付き帽子ぼうし面おももちゆたか
 に洋服ようふくかるゝと花々はな敷しきを、坊ぼつちゃん坊ぼつちゃんとして此子このこの追ついで従しゅうするもをかし、多おほ
 くの中に龍華寺りゅうげじの信如しんによとて、千筋すぢとなづる黒髪くろかみも今いまいく歳とせのさかりにか、やがては墨す
 染みぞめにかへぬべき袖そでの色いろ、發心はつしんは腹はらからか、坊ぼつは親おやゆづりの勉べんきやう強ちやうものあり、性來せいらい
 をとなしきを友達ともだちいぶせく思おもひて、さまゝの惡戲いたづらをしかけ、猫ねこの死骸しがいを繩なわにくゝ
 りてお役目やくめなれば引導いんだうをたのみますと投げつけし事ことも有りしが、それは昔むかし、今は校内かうない

一の人とて假にも侮りての處業はなかりき、歳は十五、並背にていが栗の頭髮も思ひ
 なしか俗とは變りて、藤本信如と訓にてすませど、何處やら釋といひたげの素振なり。

(二)

八月廿日は千束神社のまつりとて、山車屋臺に町々の見得をはりて土手をのぼりて
 廓内までも入込まんづ勢ひ、若者が氣組み思ひやるべし、聞かぢりに子供とて由斷のな
 りがたき此あたりのなれば、そろひの浴衣は言はでものこと、銘々に申合せて生意
 氣のありたけ、聞かば膽もつぶれぬべし、横町組と自らゆるしたる亂暴の子供大
 將に頭の長とて歳も十六、仁和賀の金棒に親父の代理をつとめしより氣位ゑらく成
 りて、帯は腰の先に、返事は鼻の先にていふ物と定め、にくらしき風俗、あれが頭の子
 でなくばと鳶人足が女房の蔭口に聞えぬ、心一ぱいに我がまゝを徹して身に合は
 ぬ巾をも廣げしが、表町に田中屋の正太郎とて歳は我れに三つ劣れど、家に金あり
 身に愛嬌あれば人も憎くまぬ當の敵あり、我れは私立の學校へ通ひしを、先方は公
 立なりとて同じ唱歌も本家のやうな顔をしておる、去年も一昨年も先方には大人の末社

がつきて、まつりの趣向も我れよりは花を咲かせ、喧嘩に手出しのなりがたき仕組
 みも有りき、今年又もや負けにならば、誰れだと思ふ横町の長吉だぞと平常の力だ
 ては空いばりとけなされて、辨天ぼりに水およぎの折も我が組に成る人は多かるまじ、
 力を言はゞ我が方がつよけれど、田中屋が柔和ぶりにごまかされて、一つは學問が
 來おるを恐れ、我が横町組の太郎吉、三五郎など、内々は彼方がたに成たるも口惜し
 まつりは明後日、いよく我が方が負け色と見えたらば、破れかぶれに暴れて暴れて、正
 太郎が面に疵一つ、我れも片眼片足なきものと思へば爲やすし、加擔人は車屋の丑
 に元結よりの文、手遊屋の彌助などあらば引けは取るまじ、おゝ夫よりは彼の人の事
 彼の人の事、藤本のならば宜き智恵も貸してくれんと、十八日の暮れちかく、物いへば
 眼口にうるさき蚊を拂ひて竹村しげき龍華寺の庭先から信如が部屋へのそりのそり
 と、信さん居るか顔を出しぬ。
 お己れの爲る事は亂暴だと人がいふ、亂暴かも知れないが口惜しい事は口惜しいや、な
 あ聞いてくれ信さん、去年も己れが處の末弟の奴と正太郎組の短小野郎と萬燈のたゝ
 き合ひから始まつて、夫れといふと奴の中間がばらばらと飛出しやあがつて、どうだらう
 小さな者の萬燈を打こわしちまつて、胴揚にしやがつて、見やがれ横町のぎまをと

一人がいふと、間拔に背のたかい大人のやうな面をして居る團子屋の頓馬が、頭もあるも
 のか尻尾だ尻尾だ、豚の尻尾だなんて悪口を言つたとき、己らあ其時千束様へねり
 込んで居たもんだから、あとで聞いた時に直様仕かへしに行かうと言つたら、親父さん
 に頭から小言を喰つて其時も泣寝入り、一昨年はそらね、お前も知つてる通り筆屋の店
 へ表町の若衆が寄合て茶番か何かやつたらう、あの時己いらが見に行つたら、
 横町は横町の趣向がありませうなんて、おつな事を言ひやがつて、正太ばかり客に
 したのも胸にあるわな、いくら金が有るとつて質屋のくづれの高利貸が何たら様だ、彼
 んな奴を生して置くより擲きころす方が世間のためだ、己らあ今度のまつりには如何して
 も亂暴に仕掛けて取かへしを付けようと思ふよ、だから信さん友達かひに、夫れはお前
 が嫌やだといふのも知れてるけれども何卒我れの肩を持つて、横町組の耻すゝぐのだけ
 ら、ね、おい、本家本元の唱歌だなんて威張りおる正太郎を取ちめて呉れないか、
 おれが私立の寝ぼけ生徒といはれ、ばお前の事も同然だから、後生だ、どうぞ、助ける
 と思つて大萬燈を振廻しておくれ、己れは心から底から口惜しくつて、今度負けたら
 長吉の立端は無いと無茶にくやしがつて大幅の肩をゆすりぬ。だつて僕は弱いもの。
 弱くても宜いよ。万燈は振廻せないよ。振廻さなくても宜いよ。僕が這入ると負け

るが宜いかへ。負けても宜いのさ、夫れは仕方が無いと諦めるから、お前は何も爲ないで
 宜いから唯横町の組だといふ名で、威張つてさへ呉れると豪氣に人氣がつくからね、己
 れは此様な無學漢だのにお前は學が出来るからね、向ふの奴が漢語か何かで冷語でも
 言つたら、此方も漢語で仕かへしておくれ、あゝ好い心持ださつぱりしたお前が承
 知をしてくれゝば最う千人力だ、信さん有がたうと常に無い優しき言葉も出るものな
 り。

一人は三尺帯に突かけ草履の仕事師の息子、一人はかわ色金巾の羽織に紫の兵子帯とい
 ふ坊様仕立、思ふ事はうらはらに、話しは常に喰ひ違ひがちなれど、長吉は我が門
 前に産聲を揚げしものと大和尚夫婦が鬚眉もあり、同じ學校へかよへば私立私立
 とけなされるも心わるきに、元來愛敬のなき長吉なれば心から味方につく者も
 なき憐れさ、先方は町内の若衆どもまで尻押をして、ひがみでは無し長吉が
 負けを取る事罪は田中屋がたに少なからず、見かけて頼まれし義理としても嫌やとは言ひ
 かねて信如、夫れではお前の組に成るさ、成るといつたら嘘は無いが、成るべく喧嘩
 は爲ぬ方が勝だよ、いよく先方が賣りに出たら仕方が無い、何いぎと言へば田中の正
 太郎位小指の先さと、我が力の無いは忘れて、信如は机の引出しから京都みやげ

に貰ひたる、小鍛冶の小刀を取出して見すれば、よく利れそうだねへと覗き込む長吉が顔、あぶなし此物を振廻してなる事か。

(三)

と解かば足にもとゞくべき毛髪を、根あがりに堅くつめて前髪大きく鬚おもたげの、緒熊といふ名は恐ろしけれど、此鬚を此頃の流行とて良家の令嬢も遊ばさるゝぞかし、色白に鼻筋とほりて、口もとは小さからねど締りたれば醜くからず、一つ一つにとり取たてゝは美人の鑑に遠けれど、物いふ聲の細く清しき、人を見る目の愛嬌あふれて、身のこなしの活々したるは快き物なり、柿色に蝶鳥を染めたる大形の浴衣きて、黒襦子と染分絞りの晝夜帯胸だかに、足にはぬり木履こゝらあたりにも多くは見かけぬ高きをはきて、朝湯の歸りに首筋白々と手拭さげたる立姿を、今三年の後に見たしと廓がへりの若者は申き、大黒屋の美登利とて生國は紀州、言葉のいさゝか訛れるも可愛く、第一は切れ離れよき氣象を喜ばぬ人なし、子供に似合ぬ銀貨入れの重きも道理、姉なる人が全盛の餘波、延いては遣手新造が姉への世辭にも、美しいや

ん人形をお買ひなされ、これはほんの手鞠代と、呉れるに恩を着せねば貰ふ身の有が
 たくも覺えず、まくはまくは、同級の女生徒二十人に揃ひのごむ鞠を與へしはおろか
 の事、馴染の筆やに店ざらしの手遊を買しめて、喜ばせし事もあり、さりとは日々夜
 々の散財、此歳この身分にて叶ふべきにあらず、末は何となる身ぞ、両親ありながら
 お目に見てあらし詞をかけたる事も無く、樓の主が大切がる様子も怪しきに、聞けば養
 女にもあらず親戚にてはもとより無く、姉なる人が身賣りの當時、鑑定に來たりし樓
 の主が誘ひにまかせ、此地に活計もとむとて親子三人が旅衣、たち出しは此譯、そ
 れより奥は何なれや、今は寮のあづかりをして母は遊女の仕立物、父は小格子の書記
 に成りぬ、此身は遊藝手藝學校にも通はせられて、其ほうは心のまゝ、半日は姉
 の部屋、半日は町に遊んで見聞くは三味に太鼓にあけ紫のなり形、はじめ藤色絞りの
 半襟を袷にかけて着て歩るきしに、田舎物いなか者も町内の娘どもに笑はれしを口
 惜しがりて、三日三夜泣きつゞけし事も有しが、今は我れより人々を嘲りて、野暮な
 姿と打つけの悪まれ口を、言ひ返すものも無く成りぬ。二十日はお祭りなれば心一ぱい面
 白い事をしてと友達のをせがむに、趣向は何なりと各自に工夫して大勢の好い事
 が好いでは無いか、幾金でもいゝ私が出すからとて例の通り勘定なしの引受けに、子供

なかま 中間の女王様又とあるまじき恵みは大人よりも利きが早く、茶番にしよう、何處の
 かせ 店を借りて往來から見えるやうにしてと一人が言へば、馬鹿を言へ、夫れよりはお神
 こし 輿をこしらへてお呉れな、蒲田屋の奥に飾つてあるやうな本當のを、重くても構はしな
 い、やつちよいやつちよい譚なしだと捻ぢ鉢巻する男子のそばから、夫れでは私たちが
 つま 詰らない、皆が騒ぐを見るばかりでは美登利さんだと面白くはあるまい、何でもお前
 の 田中の正太は可愛い、女の一むれは祭りを抜きに常盤座をと、言いたげの口振をかし、
 たなか 田中の正太は可愛い、女の一むれは祭りを抜きに常盤座をと、言いたげの口振をかし、
 の 處にも少しは有るし、足りないのを美登利さんに買つて貰つて、筆やの店で行らうでは
 な 無いか、己れが映し人で横町の三五郎に口上を言はせよう、美登利さん夫れにしない
 かと言へば、あゝ夫れは面白からう、三ちゃんの口上ならば誰れも笑はずには居ら
 ついで 来まい、序にあの顔がうつると猶おもしろいと相談はとくのひて、不足の品を正太が
 かいものやく、汗に成りて飛び廻るもをかし、いよく明日と成りては横町までも其沙汰聞
 えぬ。

うつや鼓のしらべ、三味の音色に事かゝぬ場處も、祭りは別物、酉の市を除けては一年
 一度の賑ひぞかし、三島さま小野照さま、お隣社づから負けまじの競ひ心をかしく、横
 町も表も揃ひは同じ眞岡木綿に町名くづしを、去歳よりは好からぬ形をつぶやくも
 有りし、口なし染の麻だすき成るほど太きを好みて、十四五より以下なるは、達磨、木
 兔、犬はり子、さま／＼の手遊を數多きほど見得にして、七つ九つ十一つくるも
 あり、大鈴小鈴背中にながらつかせて、驅け出す足袋はだしの勇ましく可笑し、群れを離
 れて田中の正太が赤筋入りの印半天、色白の首筋に紺の腹がけ、さりとは見な
 れぬ扮粧とおもふに、しごいて締めし帯の水淺黄も、見よや縮緬の上染、襟の
 印のあがりも際立て、うしろ鉢巻きに山車の花一枝、革緒の雪駄おとのみはすれど、馬
 鹿ばやしの中間には入らざりき、夜宮は事なく過ぎて今日一日の日も夕ぐれ、筆やが店に
 寄りあひ寄合しは十二人、一人かけたる美登利が夕化粧の長さに、未だか未だかと正太は門
 へ出つ入りつして、呼んで來い三五郎、お前はまだ大黒屋の寮へ行つた事があるまい、
 庭先から美登利さんと言へば聞える筈、早く、早くと言ふに、夫れならば己れが呼んで
 來る、萬燈は此處へあづけて行けば誰れも蟬燭ぬすむまい、正太さん番をたのむと

あるに、吝嗇な奴め、其手間で早く行けと我が年したに叱かられて、おつと来たさの次郎
 左衛門、今の間とかけ出して韋駄天とはこれをや、あれ彼の飛びやうが可笑しいとて見送
 りし女子どもの笑ふも無理ならず、横ぶとりして背ひく、頭の形は才槌とて首みぢか
 く、振むけての面を見れば出額の獅子鼻、反齒の三五郎といふ仇名おもふべし、色は論
 なく黒きに感心なは目つき何處までもおどけて兩の頬に笑くほの愛敬、目かくしの福
 笑ひに見るやうな眉のつき方も、さりとはをかしく罪の無き子なり、貧なれや阿波ちぢ
 みの筒袖、己れは揃ひが間に合はなんだと知らぬ友には言ふぞかし、我れを頭に六人の
 子供を、養ふ親も轅棒にすがる身なり、五十軒によき得意場は持たりとも、内證の
 車は商賣もの、外なれば詮なく、十三になれば片腕と一昨年より並木の活版所へ
 も通ひしが、怠惰ものなれば十日の辛棒つゞかず、一ト月と同じ職も無くて霜月より
 春へかけては突羽根の内職、夏は検査場の氷屋が手傳ひして、呼聲をかしく客を
 ひ引くに上手なれば、人には調法がられぬ、去年は仁和賀の臺引きに出しより、友達
 いやしがりて萬年町の呼名今に残れども、三五郎といへば滑稽者と承知して憎くむ
 者の無きも一徳なりし、田中屋は我が命の綱、親子が蒙むる御恩すくなからず、日歩とか
 や言ひて利金安からぬ借りなれど、これなくてはの金主様あだには思ふべしや、三公己

れが町へ遊びに来いと呼ばれて嫌やとは言はれぬ義理あり、されども我れは横町に生れ
 て横町に育ちたる身、住む地處に龍華寺のもの、家主が長吉が親なれば、表むき
 彼方に背く事かなはず、内々に此方の用をたして、にらまるゝ時の役廻りつらし。正
 太は筆やの店へ腰をかけて、待つ間のつれ／＼に忍ぶ戀路を小聲にうたへば、あれ由
 斷がならぬと内儀さまに笑はれて、何がなしに耳の根あかく、まちくないの高聲に皆も
 來いと呼つれて表へ驅け出す出合頭、正太は夕飯なぜ喰べぬ、遊びに耄けて先刻に
 から呼ぶをも知らぬか、誰様も又のちほど遊ばせて下され、これは御世話と筆やの妻にも
 挨拶して、祖母が自からの迎ひに正太いやが言はれず、其まゝ連れて歸らるゝあとは
 俄かに淋しく、人數は左のみ變らねど彼の子が見えねば大人までも寂しい、馬鹿さわぎも
 せねば串談も三ちやんの様では無けれど、人好きのするは金持の息子さんに珍らし
 い愛敬、何と御覽じたか田中屋の後家さまがいやらしさを、あれで年は六十四、白粉
 をつけぬがめつけ物なれど丸鬚の大きき、猫なで聲して人の死ぬをも構はず、大方臨
 終は金と情死なさるやら、夫れでも此方どもの頭の上らぬは彼の物の御威光、さり
 とは欲しや、廓内の大きい樓にも大分の貸付があるらしう聞きましたと、大路に立ちて
 二三人の女房よその財産を數へぬ。

(五)

待つ身につらき夜半の置炬燵、それは戀ぞかし、吹風すゞしき夏の夕ぐれ、ひるの暑
 さを風呂に流して、身じまいの姿見、母親が手づからそゞけ髪つくるひて、我が子
 がら美しくしきを立ちて見、居て見、首筋が薄かつたと猶そいひける、單衣は水色友
 仙の涼しげに、白茶金らんの丸帯少し幅の狭いを結ばせて、庭石に下駄直すまで
 時は移りぬ。まだかまだかと堀の廻りを七度び廻り、欠伸の數も盡きて、拂ふとすれど名
 物の蚊に首筋額ぎわしたゝか螫れ、三五郎弱りきる時、美登利立出でゝいざと言ふに、
 此方は言葉もなく袖を捉へて驅け出せば、息がはづむ、胸が痛い、そんなに急ぐならば此
 方は知らぬ、お前一人でお出と怒られて、別れ別れの到着、筆やの店へ來し時は正
 太が夕飯の最中とおぼえし。あゝ面白くない、おもしろくない、彼の人が來なけれ
 ば幻燈をはじめめるのも嫌、伯母さん此處の家に智恵の板は賣りませぬか、十六武藏でも
 何でもよい、手が暇で困ると美登利の淋しがれば、夫れよと即坐に鉢を借りて女子づれば
 切抜きにかゝる、男は三五郎を中に仁和賀のさらひ、北廓全盛見わたせば、軒は提

ようちん 電氣燈、いつも賑ふ五丁町、と諸聲をかしくはやし立つるに、記憶のよければ
 燈 電氣燈、いつも賑ふ五丁町、と諸聲をかしくはやし立つるに、記憶のよければ
 去年一昨年ときかのぼりて、手振手拍子ひとつも變る事なし、うかれ立たる十人あまり
 の騒ぎなれば何事と門に立ちて人垣をつくりし中より。三五郎は居るか、一寸來く
 れ大急ぎだと、文次といふ元結よりの呼に、何の用意もなくおいしよ、よし來と身が
 るに敷居を飛び越ゆる時、此二夕股野郎覺悟をしろ、横町の面よごしめ唯は置かぬ、誰だ
 と思ふ長吉だ生ふざけた眞似をして後悔するなど頬骨一撃、あつと魂消て逃入
 る襟がみを、つかんで引出す横町の一むれ、それ三五郎をたゞき殺せ、正太を引出し
 てやつて仕舞へ、弱虫にげるな、團子屋の頓馬も唯は置ぬと潮のやうに沸かへる騒ぎ、
 筆屋が軒の掛提燈は苦もなくたゞき落されて、釣らんぶ危なし店先の喧嘩なりま
 せぬと女房が喚きも聞ばこそ、人数は大凡十四五人、ねち鉢巻に大萬燈ふりた
 て、當るがまゝの亂暴狼藉、土足に踏み込む傍若無人、目ぎす敵の正太が見え
 ねば、何處へ隠した、何處へ逃げた、さあ言はぬか、言はぬか、言はさずに置く物かと三
 五郎を取こめて撃つやら蹴るやら、美登利くやくしく止める人を搔きのけて、これお前がた
 は三ちやんに何の咎がある、正太さんと喧嘩がしたくば正太さんとしたが宜い、逃
 げもせねば隠くしもしない、正太さんは居ぬでは無いか、此處は私が遊び處、お前がた

に指でもさゝしはせぬ、ゑゝ憎くらしい長吉め、三ちやんを何故ぶつ、あれ又引たほ
 した、意趣があらば私をお撃ち、相手には私になる、伯母さん止めずに下されと身もだへ
 して罵れば、何を女郎め頼術たゝく、姉の跡つぎの乞食め、手前の相手にはこれが相
 應だと多人数のうしろより長吉、泥草鞋つかんで投げれば、ねらひ違はず美登
 りが、利が、際、にむさき物したゝか、血かかへて立あがるを、怪我でもしてはと抱きとむ
 る女房、房、ざまを見ろ、此方には龍華寺の藤本がついて居るぞ、仕かへしには何時で
 も来い、薄馬鹿野郎め、弱虫め、腰ぬけの活地なしめ、歸りには待伏せする、横町の
 闇に氣をつけると三五郎を土間に投出せば、折から靴音たれやらが交番への注進今
 ぞしる、それと長吉聲をかくれば丑松文次その余の十餘人、方角をかへてばらノ
 へと逃足はやく、※け裏の露路にかぐむも有るべし、口惜しいくやしい口惜しい口惜し
 い、長吉め文次め丑松め、なぜ己れを殺さぬ、殺さぬか、己れも三五郎だ唯死ぬも
 のか、幽霊になつても取殺すぞ、覺えて居ろ長吉めと湯玉のやうな涙をはらゝ、
 はては大聲にわつと泣き出す、身内や痛からん筒袖の處々引きかれて背中も腰も
 砂まぶれ、止めるにも止めかねて勢ひの凄まじさに唯おどろくと氣を吞まれし、筆やの女
 房走り寄りて抱きおこし、背中をなで砂を拂ひ、堪忍をし、堪忍をし、何と思つ

ても先方は大勢、此方は皆よわい者ばかり、大人でさへ手が出しかねたに叶はぬは知れて居る、夫れでも怪我のないは仕合、此上は途中の待ぶせが危ない、幸ひの巡査さまに家まで見て頂かば我々も安心、此通りの子細で御座ります故と筋をあらく折からの巡査に語れば、職掌がらいざ送らんと手を取らるゝに、いゑく送つて下さらずとも歸ります、一人で歸りますと小さく成るに、こりや怕い事は無い、其方の家まで送る分の事、心配するなど微笑を含んで頭を撫でらるゝに彌々ちゞみて、喧嘩をしたと言ふと親父さんに叱かられます、頭の家は大屋さんで御座りますからとて洩れるをすかして、さらば門口まで送つて遣る、叱からるゝやうの事は爲ぬわとて連れらるゝに四隣の人胸を撫で、はるかに見送れば、何とかしけん横町の角にて巡査の手をば振はなして一目散に逃げぬ。

(六)

めづらしい事、此炎天に雪が降りはせぬか、美登利が學校を嫌やがるはよくゝの不機嫌、朝飯がすゝまずば後刻に鮎でも誂へようか、風邪にしては熱も無ければ大方

きのふの疲れと見える、太郎様への朝参りは母さんが代理してやれば御免こふむれとありしに、いゝく姉さんの繁昌するやうにと私が願をかけたのなれば、参らねば氣が濟まぬ、お寶錢下され行つて來ますと家を驅け出して、中田圃の稻荷に鰐口ならして手を合せ、願ひは何ぞ行きも歸りも首うなだれて畔道づたひ歸り來る美登利が姿、それと見て遠くより聲をかけ、正太はかけ寄りて袂を押し、美登利さん昨夕は御免よと突然にあやまれば、何もお前に謝罪られる事は無い。夫れでも己れが憎くまれて、己れが喧嘩の相手だもの、お祖母さんが呼びにさへ來なければ歸りはしない、そんなに無暗に三五郎をも撃たしはしなかつた物を、今朝三五郎の處へ見に行つたら、彼奴も泣いて口惜しがつた、己れは聞いてさへ口惜しい、お前の顔へ長吉め草履を投げたと言ふでは無い、彼の野郎亂暴にもほどがある、だけれど美登利さん堪忍してお呉れよ、己れは知りながら逃げて居たのでは無い、飯を掻込んで表へ出やうとするとお祖母さんがお湯に行くといふ、留守居をして居るうちの騒ぎだらう、本當に知らなかつたのだからねと、我が罪のやうに平あやまりに謝罪で、痛みはせぬかと額際を見あげれば、美登利につこり笑ひて何負傷をするほどでは無い、夫れだが正さん誰れが聞いても私が長吉に草履を投げられたと言つてはいけないよ、もし萬一お母さんが聞きでもすると私が叱かられる

から、親おやでさへ頭つむりに手はあげぬものを、長ちようきち吉きちづれが草履ざうりの泥どろを額ひたいにぬられては踏ふまれ
 たも同じおなだからとて、背そむける顔かほのいとをしく、本當ほんとうに堪かん忍にんしておくれ、みんな己おれが惡わ
 るい、だから謝あやまる、機嫌きげんを直なほして呉くれないか、お前に怒おこられると己おれが困こまるものと話はな
 つれて、いつしか我家わがやの裏うら近く來くれば、寄よらないか美登利みどりさん、誰だれも居あはしない、祖お
 母ばあさんも日ひがけを集あつめに出でたらうし、己おればかりで淋さびしくてならない、いつか話はなした錦にしき
 繪ゑを見みせるからお寄よりな、種いろ々くがあるからと袖そでを捉とらへて離はなれぬに、美登利みどりは無む言ごん
 になづいて、佗わびた折戸をりどの庭にはぐち口くちより入いれば、廣ひろからねども、鉢はちものをかしく並ならびて、
 軒のきにつり忍しのぶ艸すい、これは正しょうた太たが午うまの日ひの買かひ物ものと見みえぬ、理わけ由ゆしらぬ人は小首こくびやかたぶけ
 ん。町てうない内ない一の財産家ものもちといふに、家内かないは祖母ばばと此これ子こ二人ふたり、萬よろづの鍵かぎに下した腹はら冷ひえて留る守すは見み
 わしたの總そう長屋ながや、流石さすがに錠でうまへ前まへくたくもあらざりき、正しょうた太たは先さきへあがりて風入かぜいりのよき
 場所ところを見みたて、此こゝ處こゝへ來こぬかと團扇うちわの氣きあつかひ、十三じふさんの子供こどもにはませ過ぎすてをかし。
 古ふるくより持もちつたへし錦繪にしきゑかずく取とり出いだし、褒ほめらるゝを嬉うれしく美登利みどりさん昔むかしの羽子板はごいた
 を見みせよう、これは己おれの母かさんがお邸やしきに奉ほう公こうして居ゑる頃ころいたゞいたのだとき、をか
 いでは無ないか此この大おほきい事こと、人ひとの顔かほも今いまのとは違ちがふね、あゝ此この母かさんが生いきて居ゑると宜い
 が、己おれが三さんつの歳とし死しんで、お父とうさんは在あるけれど田舎いなかの實家じつかへ歸かへつて仕舞しまつたから今いまは祖お

母さんばかりさ、お前は浦山しいねと無端に親の事を言ひ出せば、それ繪がぬれる、男
 が泣く物では無いと美登利に言はれて、己れは氣が弱いのかしら、時々種々の事を
 思ひ出すよ、まだ今時分は宜いけれど、冬の月夜なかに田町あたりを集めに廻ると土
 手まで来て幾度も泣いた事がある、何さむい位で泣きはしない、何故だか自分も知らぬが
 種々の事を考へるよ、あゝ一昨年から己れも日がけの集めに廻るさ、祖母さんは年寄り
 だから其うちにも夜るは危ないし、目が悪るいから印形を押たり何かに不自由だからね、
 今まで幾人も男を使つたけれど、老人に子供だから馬鹿にして思ふやうには動いて呉
 れぬと祖母さんが言つて居たつけ、己れが最う少し大人に成ると質屋を出さして、昔の
 通りでなくとも田中屋の看板をかけると楽しみにして居るよ、他處の人は祖母さんを吝
 だと言ふけれど、己れの爲に儉約して呉れるのだから氣の毒でならない、集金に行くう
 ちでも通新町や何かに随分可愛想なのがあるから、嗚お祖母さんを悪るくいふだ
 らう、夫れを考へると己れは涙がこぼれる、矢張り氣が弱いのだね、今朝も三公の家へ取
 りに行つたら、奴め身體が痛い癖に親父に知らすまいとして働いて居た、夫れを見たら己
 れは口が利けなかつた、男が泣くてへのは可笑しいでは無いか、だから横町の野番漢
 に馬鹿にされるのだと言ひかけて我が弱いを恥かしさうな顔色、何心なく美登利と

見合す目つまの可愛さ。お前の祭の姿は大層よく似合つて浦山しかつた、私も男だと
 彼んな風がして見たい、誰れのよりも宜く見えたと賞められて、何だ己れなんぞ、お前こ
 そ美しくいや、廓内の大卷さんよりも奇麗だと皆がいふよ、お前が姉であつたら己れは
 何様に肩身が廣かろう、何處へゆくにも追従て行つて大威張りに威張るがな、一人も兄
 弟が無いから仕方が無い、ねへ美登利さん今度一處に寫眞を取らないか、我れは祭り
 の時の姿で、お前は透綾のあら縞で意氣な形をして、水道尻の加藤でうつさう、龍華寺
 の奴が浦山しがるやうに、本當だぜ彼奴は屹度怒るよ、眞青に成つて怒るよ、にゑ
 肝だからね、赤くはならない、夫れとも笑ふかしら、笑はれても構はない、大きく取つて
 看板に出たら宜いな、お前は嫌やかへ、嫌やのやうな顔だものと恨めるもをかしく、變
 な顔にうつるとお前に嫌らはれるからとて美登利ふき出して、高笑ひの美音に御機嫌や
 直りし。

朝冷はいつしか過ぎて日かげの暑くなるに、正太さん又晩によ、私の寮へも遊びにお
 出でな、燈籠ながして、お魚追ひますよ、池の橋が直つたれば怕い事は無いと言ひ捨て
 に立出る美登利の姿、正太うれしげに見送つて美しくと思ひぬ。

(七)

龍華寺の信如、大黒屋の美登利、二人ながら學校は育英舎なり、去りし四月の未つ
 かつた、櫻は散りて青葉のかけに藤の花見といふ頃、春季の大運動會とて水の谷の原
 にせし事ありしが、つな引、鞆なげ、繩とびの遊びに興をそへて長き日の暮るゝを忘れし、
 そのをり、信如いかにしたるか平常の沈着に似ず、池のほとりの松が根につま
 づきて赤土道に手をつきたれば、羽織の袂も泥に成りて見にくかりしを、居あはせたる
 美登利みかねて我が紅の絹はんけちを取出し、これにてお拭きなされと介抱をなしける
 に、友達の中なる嫉妬や見つけて、藤本は坊主のくせに女と話をして、嬉しさうに
 禮を言つたは可笑しいでは無いか、大方美登利さんは藤本の女房になるのであらう、
 お寺の女房なら大黒さまと言ふのだなど、取沙汰しける、信如元來かゝる事を人
 の上に聞くも嫌ひにて、苦き顔をして横を向く質なれば、我が事として我慢のなるべきや、
 夫れよりは美登利といふ名を聞くことに恐ろしく、又あの事を言ひ出すかと胸の中もやく
 やして、何とも言はれぬ厭やな氣持なり、さりながら事ごとに怒りつける譯にもゆかねば、
 成るだけは知らぬ體をして、平氣をつくりて、むづかしき顔をして遣り過ぎる心なれど、

さし向^{むか}ひて物^{もの}などを問^とはれたる時^{とき}の當^{たう}惑^{わく}さ、大^{おほ}方^{かた}は知^しりませぬの一^{こと}言^{こと}にて濟^すませど、
 苦^{くる}しき汗^{あせ}の身^みうち^なに流^{なが}れて心^{こゝろ}ぼそき思^{おも}ひなり、美^み登^{どり}利^りはさる事^{こと}も心^{こゝろ}にとまらねば、最^{はじ}初^めは
 藤^{ふぢ}本^{もと}さん藤^{ふぢ}本^{もと}さんと親^{した}しく物^{もの}いひかけ、學^{がく}校^{かう}退^ひけての歸^{かへ}りがけに、我^われは一^あ足^しはや
 くて道^{みち}端^たに珍^{めづ}らしき花^{はな}などを見^みつけられれば、おくれし信^{しん}如^{によ}を待^{まち}合^あして、これ此^{こん}様^なうつ
 くしい花^{はな}が咲^{さい}てあるに、枝^{えだ}が高^{たか}くて私^{わたし}には折^をれぬ、信^{のぶ}さんは脊^{せい}が高^{たか}ければお手^てが届^ときまし
 よ、後^ご生^{せう}折^をつて下^{くだ}されと一^なむれの中^{なか}にては年^{とし}長^{かさ}なるを見^みつけて頼^{たの}めば、流^{さすが}石^がに信^{しん}如^{によ}袖^{そで}
 ぶり切^きりて行^ゆきすぎる事^{こと}もならず、さりとして人^{ひと}の思^{おも}はくいよく愁^つらければ、手^て近^{ぢか}の枝^{えだ}を引^ひ
 寄^きせて好^{よし}悪^{あし}かまはず申^{まう}譯^{しわけ}ばかりに折^をりて、投^{なげ}つけるやうにすたすたと行^ゆきすぎるを、
 さりとは愛^{あい}敬^{きやう}の無^なき人^{ひと}と惘^{あき}れし事^{こと}も有^{あり}しが、度^{たぎ}かさなりての末^{すゑ}には自^{おのづか}ら故^{わざと}意^いの意^い地^ぢ悪^{わる}のや
 うに思^{おも}はれて、人^{ひと}には左^{ひだり}もなきに我^われにばかり愁^つらき處^{しう}爲^ぢをみせ、物^{もの}を問^とへば碌^{ろく}な返^{へん}事^じ
 た事^{こと}なく、傍^{そば}へゆけば逃^にげる、はなしを爲^すれば怒^{おこ}る、陰^{いん}氣^きらしい氣^きのつまる、どうして好^よ
 いやら機^き嫌^{けん}の取^とりやうも無^ない、彼^あのやうなこ六^むづかしやは思^{おも}ひのまゝに捻^{ひね}れて怒^{おこ}つて意^い地^ぢ
 はるが爲^したいならんに、友^{とも}達^{だち}と思^{おも}はずは口^{くち}を利^きくも入^いらぬ事^{こと}と美^み登^{どり}利^り少^{すこ}し疝^{かん}にさはりて、
 用^{よう}の無^なければ摺^すれ違^{ちが}ふても物^{もの}いふた事^{こと}なく、途^{とちう}中^{ちゆう}に逢^あひたりとて挨^{あい}拶^{さつ}など思^{おも}ひもかけず、
 唯^{ただ}いつとなく二^{ふた}人^{たり}の中^{なか}に大^{おほ}川^{かわ}一^{よこ}つ横^{よこ}たはりて、舟^{ふね}も筏^{いかだ}も此^{こゝ}處^ちには御^ご法^{はつ}度^と、岸^{きし}に添^そふてお

もひおもひの道みちをあるきぬ。

祭まつりは昨日きのふに過ぎすて其そのあくる日ひより美登利みどりの學がく校かうへ通かよふ事ことふつと跡あとたえしは、問とふまでも無く額ひたいの泥どろの洗あらふても消えがたき恥辱ちよよくを、身みにしみて口惜くやくしければぞかし、表町おもてまちとて横町よこまちとて同じ教場けうじやうにおし並ならべば朋輩ほうばいに變かわりは無なき筈はずを、をかしき分け隔へだてと常つ日頃ねひごろ意地いちぢを持ちも、我われは女をんなの、とても敵かたひがたき弱味よわみをば付目つけめにして、まつりの夜よの處し爲うちはいかなる卑怯ひきやうぞや、長吉ちやうきちのわからずやは誰たれも知る亂暴らんぼうの上うへなしなれど、信如しんによの尻しりおし無なくは彼あれほどに思おもひ切りて表町おもてまちをば暴あらし得えじ、人前ひとまへをば物識ものしりらしく温す順なほにつくりて、陰かげに廻まわりて機からくり械いとの糸ひきを引きしは藤本ふぢもとの仕業しわざに極きはまりぬ、よし級きうは上うへにせよ、學ものは出來できるにせよ、龍華寺りうげじさまの若旦那わかだんなにせよ、大黒屋だいこくやの美登利紙みどりがみ一枚まいのお世せ話わにも預あづからぬ物ものを、あのやうに乞食呼こじきよほはりして貫もらふ恩おんは無なし、龍華寺りうげじは何どれ立派りつぱな檀だ家んかありと知らねど、我わがが姉あねさま三年ねんの馴染なじみに銀行ぎんこうの川様かわさま、兜町かぶとちやうの米様よねさまもあり、議員ぎいんの短小ちひささま根曳ねびきして奥おくさまにと仰おほせられしを、心意氣こころいきに入いらねば姉あねさま嫌きらひてお受うけはせざりしが、彼あの方かたとても世よには名高なだかきお人ひとと遣手衆やりてしゆの言いはれし、嘘うそならば聞きいて見みよ、大黒だいこくやに大卷おほまきの居いずば彼あの樓いゑは闇やみとかや、さればお店みせの旦那だんなとても父とさん母かさん我わが身みをも粗略そりやくには遊あそばさず、常々つね大切たいせつがりて床とこの間まにお据すへなされし瀬戸物せとものの

大黒様をば、我れいつぞや坐敷の中にて羽根つくとて騒ぎし時、同じく並びし花瓶を
 散々、に破損をさせしに、旦那次の間に御酒めし上りながら、美登利お轉婆が過
 ぎるのと言はれしばかり小言は無かりき、他の人ならば一通りの怒りでは有るまじと、女
 子衆達にあとくまで羨まれしも必竟は姉さまの威光ぞかし、我れ寮住居に人の
 留守居はしたりとも姉は大黒屋の大巻、長吉風情に負けを取るべき身にもあらず、
 龍華寺の坊さまにいぢめられんは心外と、これより學校へ通ふ事おもしろからず、
 我まゝの本性あなどられしが口惜しさに、石筆を折り墨をすて、書物も十露盤も入ら
 ぬ物にして、中よき友と埒も無く遊びぬ。

(八)

走れ飛ばせの夕べに引かへて、明けの別れに夢をのせ行く車の淋しさよ、帽子まぶかに人
 目を厭ふ方様もあり、手拭とつて頬かぶり、彼女が別れに名残の一撃、いたさ身にし
 みて思ひ出すほど嬉しく、うす氣味わるやにたにたの笑ひ顔、坂本へ出ては用心し給
 へ千住がへりの青物車にお足元あぶなし、三島様の角までは氣違ひ街道、御

顔かほのしまり何いづれも緩ゆるるみて、はゞかりながら御おん鼻ばなの下したながくと見みえさせ玉たまへば、そ
 んじよ其そこ處こらに夫それ大たいした御ご男なん子し様さまとて、分ぶん厘りんの價ね値ちも無なしと、辻つちに立たちて御ご慮り外ぐわいを
 申まをすもありけり。楊やう家かの娘むすめ君くん 寵ちゆうをうけてと長ちゆう恨ごん歌かを引ひ出すまでもなく、娘むすめの子こは何いづ處こ
 にも貴きち重ちゆうがらるゝ頃ころなれど、此このあたりの裏うら屋やより赫かく奕やく姫ひめの生うまゝ事ことその例れい多おほし、築つき地ぢ
 の某それ屋やに今いまは根ねを移うつして御ご前ぜんさま方がたの御おん相あい手て、踊おどりに妙みやうを得えし雪ゆきといふ美び形けい、唯たゞ今いま
 お座敷ざしきにてお米こめのなります木きはと至し極ごくあどけなき事ことは申まをすとも、もとは此この所ところの巻まき帶おび黨づれにて
 花はながるたの内ない 職しやくせしものなり、評ひやう判はんは其その頃ころに高たかく去さるもの日ひ々々に疎うとければ、名め
 物いぶつ一つかげを消けして二度目どめの花はなは紺こう屋やの乙おと 娘むすめ、今いま千せん束そく町まちに新しんつた屋やの御ご神じん燈とうほ
 のめかして、小吉こきちと呼よばるゝ公こう園えんの尤まれ物ものも根ね生をひは同おなじ此この處ところの土つち成なりし、あけくれの
 噂うはさにも御ご出しゆ世せといふは女をんなに限かぎりて、男をとこは塵ちり塚づかさがす黒くろ斑ふちの尾をの、ありて用ようなき物ものと
 も見みゆべし、此この界かい限わいに若わかい衆しゆと呼よばるゝ町まち 並なみの息むすこ子こ、生なま意まい氣きさかりの七しち八はちより五ご人にん
 組ぐみ七しち人にん組ぐみ、腰こしに尺しやく八はちの伊だて達だてはなけれど、何なんとやら嚴いかめしき名なの親おや分ぶんが手て下かにつきて、揃そろ
 ひの手てぬぐひ長なが提てい燈とう、賽さいころ振ふる事ことおぼえぬうちは素ひ見みの格かう子し先さきに思おもひ切きつての串し
 談ようだん も言いひがたしとや、眞ま面め目めにつとむる我わが家か業げうは晝ひるのうちばかり、一ふ風ろ呂あ浴あびて日ひ
 の暮くれゆけば突つきかけ下げ駄たに七しち五ご三さんの着き物もの、何なに屋やの店みせの新しん妓こを見みたか、金かな杉すぎの糸いと屋やが娘むすめに

に似て最う一倍鼻がひくいと、頭腦の中を此様な事にこしらへて一軒ごとの格子に烟草の無
 りどり鼻紙の無心、打ちつ打たれつ是れを一世の譽と心得れば、堅氣の家の相續息
 子地廻りと改名して、大門際に喧嘩かひと出るもありけり、見よや女子の勢力
 と言はぬばかり、春秋しらぬ五丁町の賑ひ、送りの提燈いま流行らねど、茶屋が廻
 わし雪駄のおとに響き通へる歌舞音曲うかれうかれて入込む人の何を目當と言問はゞ、
 赤糸り緒熊に襦袢の裾ながく、につと笑ふ口元目もと、何處が美いとも申がたけれ
 ど華魁衆とて此處にての敬ひ、立はなれては知るによしなし、かゝる中にて朝夕を過
 ごせば、衣の白地の紅に染む事無理ならず、美登利の眼の中に男といふ者さつても怕から
 ず恐ろしからず、女郎といふ者さのみ賤しき勤めとも思はねば、過ぎし故郷を出立の
 當時ないて姉をば送りしこと夢のやうに思はれて、今日此頃の全盛に父母への孝養う
 らやましく、お職を徹す姉が身の、憂いの愁らしいの数も知らねば、まぢり戀ふる鼠なき格
 子の呪文、別れの背中^{せな}に手加^{かけん}の秘密^{ひみつ}まで、唯^{ただ}おもしろく聞^きなされて、廊^{くろなわ}ことばを町に
 いふまで去りとは耻かしからず思へるも哀なり、年はやうく數^{かず}への十四、人形^{にんげうだ}抱いて
 頬^ほずりする心は御華族のお姫様^{ひめさま}とて變りなけれど、修身^{しゅうしん}の講義^{こうぎ}、家政學^{かせいがく}のいくた
 ても學^{まな}ひしは學校^{がくかう}にてばかり、誠^{まこと}あけくれ耳^{みみ}に入りしは好いた好かぬの客^{きやく}の風説^{ふうせき}、仕着^{しき}

せ積み夜具茶屋への行わたり、派手は美事に、かなはぬは見すばらしく、人事我事分
 別をいふはまだ早し、幼な心に目の前の花のみはしるく、持まへの負けじ気性は勝手に
 馳せ廻りて雲のやうな形をこしらへぬ、氣違ひ街道、寢ぼけ道、朝がへりの殿がた一順
 すみて朝寢の町も門の箒目青海波をゑがき、打水よきほどに濟みし表町の通り
 を見渡せば、來るは來るは、萬年町山伏町、新谷町あたりを晴にして、一能一術これ
 も藝人の名はのがれぬ、よかく、飴や輕業師、人形つかひ大神樂、住吉をどり
 に角兵衛獅子、おもひおもひの扮粧して、縮緬透綾の伊達もあれば、薩摩がすりの洗ひ
 着に黒縹子の幅狹帶、よき女もあり男もあり、五人七人十人一組の大たむろもあれば、
 一人淋しき瘦せ老爺の破れ三味線かゝへて行くもあり、六つ五つなる女の子に赤※させて、
 あれば紀の國おどらすも見ゆ、お顧客は廓内に居つゞけ客のなぐさみ、女郎の憂き晴ら
 し、彼處に入る身の生涯やめられぬ得分ありと知られて、來るも來るも此處らの町に
 細かき貫ひを心に止めず、裾に海草のいかゞはしき乞食さへ門には立たず行過るぞかし、
 容貌よき女太夫の笠にかくれぬ床しの頬を見せながら、喉自慢、腕自慢、あれ彼
 の聲を此町には聞かせぬが憎くしと筆やの女房舌うちして言へば、店先に腰をか
 けて往來を眺めし湯がへりの美登利、はらりと下る前髪の毛を黄楊の櫛にちやつと

搔きあげて、伯母さんあの太夫さん呼んで來ませうとて、はたはた驅けよつて袂にすがり、
 投げ入れし一品を誰れにも笑つて告げざりしが好みの明鳥さらりと謠はせて、又御鼻
 負をの嬌音これたやすくは買ひがたし、彼れが子供の處業かと寄集りし人舌を卷
 いて太夫よりは美登利の顔を眺めぬ、伊達には通るほどの藝人を此處にせき止めて、三
 味の音、笛の音、太鼓の音、うたはせて舞はせて人の爲ぬ事して見たいと折ふし正太に
 咄いて聞かせれば、驚いて呆れて己らは嫌やだな。

(九)

如是我聞、佛説阿彌陀經、聲は松風に和して心のちりも吹拂はるべき御寺様の庫裏
 より生魚あぶる烟なびきて、卵塔場に嬰兒の襁褓ほしたるなど、お宗旨によりて構ひ
 なき事なれども、法師を木のはしと心得たる目よりは、そゞろに腥く覺ゆるぞかし、龍
 華寺の大和尚身代と共に肥へ太りたる腹なり如何にも美事に、色つやの好きこと如何
 なる賞め言葉を參らせたらばよかるべき、櫻色にもあらず、緋桃の花でもなし、剃り
 たてたる頭より顔より首筋にいたるまで銅色の照りに一點のにぎりも無く、白髪も

まじる太き眉をあげて心まかせの大笑ひなさるゝ時は、本堂の如來さま驚きて臺座より轉び落給はんかと危ぶまるゝやうなり、御新造はいまだ四十の上の幾らも越さで、いろしろ髪に髪の毛薄く、丸鬚も小さく結ひて見ぐるしからぬまでの人がら、參詣人へも愛想よく門前の花屋が口悪る噂も兎角の蔭口を言はぬを見れば、着ふるしの浴衣、總菜のお残りなどおのずからの御恩も蒙るなるべし、もとは檀家の一人成しが早くに良人を失なひて寄る邊なき身の暫時こゝにお針やとひ同様、口さへ濡らさせて下さらばとて洗ひ濯ぎよりはじめてお菜ごしらへは素よりの事、墓場の掃除に男衆の手を助くるまで働けば、和尚さま經濟より割出での御不憫かゝり、年は二十から違うて見ともなき事は女も心得ながら、行き處なき身なれば結句よき死場處と人目を恥ぢぬやうに成りけり、にがくしき事なれども女の心だて悪るからねば檀家の者も左のみは咎めず、總領の花といふを懐胎し頃、檀家の中にも世話好きの名ある坂本の油屋が隠居さま仲人といふも異な物なれど進めたてゝ表向きのものにしける、信如も此人の腹より生れて男女二人の同胞、一人は如法の變屈ものにて一日部屋の中にまぢくと陰氣らしき生れなれど、姉のお花は皮薄の二重腮かわゆらしく出來たる子なれば、美人といふにはあらねども年頃といひ人の評判もよく、素人にして捨て置くは

を惜しい物の中に加へぬ、さりとしてお寺の娘に左り棲、お釋迦が三味ひく世は知らず人の間
 え少しは憚かられて、田町の通りに葉茶屋の店を奇麗にしつらへ、帳場格子のうち此
 娘を据へて愛敬を賣らすれば、秤りの目は兎に角勘定しらずの若い者など、何がなしに
 寄つて大方毎夜十二時を聞くまで店に客のかけ絶えたる事なし、いそがしきは和和尚
 貸金の取たて、店への見廻り、法用のあれこれ、月の幾日は説教日の定めもあり帳
 面くるやら經よむやら斯くては身體のつゞき難しと夕暮れの縁先に花むしろを敷か
 せ、片肌ぬぎに團扇づかひしながら大盃に泡盛をなみくと注がせて、さかなは
 好物の蒲焼を表町のむさし屋へあらい處をとの誂へ、承りてゆく使ひ番は信如
 の役なるに、其嫌やなること骨にしみて、路を歩くにも上を見し事なく、筋向ふの筆や
 に子供づれの聲を聞けば我が事を誂らるゝかと情なく、そしらぬ顔に鰻屋の門を過ぎて
 は四邊に人目の隙をうかゞひ、立戻つて駈け入る時の心地、我身限つて腥きものは食べ
 まじと思ひぬ。

父親和尚は何處までもさばけたる人にて、少しは欲深の名にたてども人の風説に耳
 をかたぶけるやうな小膽にては無く、手の暇あらば熊手の内職もして見やうといふ
 氣風なれば、霜月の酉には論なく門前の明地に簪の店を開き、御新造に手拭ひかぶら

せて縁喜の宜いのをと呼ぼせる趣向、はじめは恥かしき事に思ひけれど、軒ならび素人の手業にて莫大の儲けと聞くに、此雑沓の中といひ誰れも思ひ寄らぬ事なれば日暮れよりは目にも立つまじと思案して、晝間は花屋の女房に手傳はせ、夜に入りては自身をり立て呼たつるに、欲なれやいつしか恥かしさも失せて、思はず聲だかに負ましょ負ましよと趾を追ふやうに成りぬ、人波にのまれて買手も眼の眩みし折なれば、現在後世ねがひに一昨日來たりし門前も忘れて、簪三本七十五錢と懸直すれば、五本ついたを三錢ならばと直切つて行く、世はぬば玉の闇の儲はこのほかにも有るべし、信如は斯かる事どもいかにも心ぐるしく、よし檀家の耳には入らずとも近邊の人々が思はく、子供中間の噂にも龍華寺では簪の店を出して、信さんが母さんの狂氣顔して賣つて居たなど、言はれもするやと恥かしく、其様な事は止しにしたが宜う御座りませうと止めし事も有りしが、大和尚大笑ひに笑ひすて、黙つて居ろ、貴様などが知らぬ事だわとて丸々相手にしては呉れず、朝念佛に夕勘定、そろばん手にしてにくくと遊ばさるゝ顔つきは我親ながら淺ましくして、何故その頭は丸め給ひしぞと恨めしくも成りぬ。

もとより、元來一腹一對の中に育ちて他人交ぜずの穩かなる家の内なれば、さして此兒を陰氣ものに

仕立あげる種は無けれども、性來をとなしき上に我が言ふ事の用ひられねば兎角に物のおもしろからず、父が仕業も母の處作も姉の教育も、悉皆あやまりのやうに思はるれど言ふて聞かれぬ物ぞと諦めればうら悲しき様に情なく、友朋輩は變屈者の意地わると目ざせども自ら沈み居る心の底の弱き事、我が蔭口を露ばかりもいふ者ありと聞けば、立ち出で、喧嘩口論の勇氣もなく、部屋にとぢ籠つて人に面の合はされぬ憶病至極の身なりけるを、學校にての出來ぶりといひ身分がらの卑しからぬにつけても然る弱虫とは知る物なく、龍華寺の藤本は生煮えの餅のやうに眞があつて氣に成る奴と憎くがるものも有りけらし。

(十)

まつ祭りの夜は田町の姉のもとへ使ひを吩咐られて、更るまで我家へ歸らざりければ、筆やの騒ぎは夢にも知らず、明日に成りて丑松文次その外の口よりこれくで有つたと傳へらるゝに、今更ながら長吉の亂暴に驚けども濟みたる事なれば咎めだてするも詮なく、我が名を借りられしばかりつく／＼迷惑に思はれて、我が爲したる事ならねど人

とゞへの氣の毒を身一つに背負たる様の思ひありき、長吉も少しは我が遣りそこね
 を恥かしう思ふかして、信如に逢はゞ小言や聞かんと其三四日は姿も見せず、やゝ餘ほ
 炎のさめたる頃に信さんお前は腹を立つか知らないけれど時の拍子だから堪忍して置お
 いて呉んな、誰れもお前正太が明巢とは知るまいでは無いか、何も女郎の一疋位相手に
 して三五郎を擲りたい事も無かつたけれど、萬燈を振込んで見りやあ唯も歸れない、ほ
 んの附景氣に詰らない事をしてのけた、夫りやあ己れが何處までも惡わいさ、お前の命ひ
 令を聞かなかつたは惡わるからうけれど、今怒られては法なしだ、お前といふ後だてが有あ
 るので己らあ大舟に乗つたやうだに、見すてられちまつては困こるだらうじや無いか、嫌い
 やだとつても此組の大將で居てくんねへ、左様どち計は組まないからとて面目な
 さゝうに謝わ罪られて見みれば夫れでも私は嫌いやだとも言いひがたく、仕方が無い遣る處までや
 るさ、弱よいもの此方の恥になるから三五郎や美登利を相手にしても仕方が無い、正し
 太に末社がついたら其時のこと、決つて此方から手出しをしてはならないと留めて、
 さのみは長吉をも叱り飛ばさねど再び喧嘩のなきやうにと祈られぬ。
 罪のない子は横町の三五郎なり、思ふさまに擲かれて蹴けられて其二三日は立居も苦くしく、
 夕ぐれ毎に父親が空車を五十軒の茶屋が軒まで運ぶにさへ、三公は何うかしたか、

ひどく弱つて居るやうだなと見知りの臺屋に咎められしほど成しが、父親はお辭氣の鐵
 とて目上の人に頭をあげた事なく廓内の旦那は言はずとも、大屋様地主様いづれ
 の御無理も御尤と受ける質なれば、長吉と喧嘩してこれこれの亂暴に逢ひま
 したと訴へればとて、それは何うも仕方が無い大屋さんの息子さんでは無いか、此方に理
 が有らうが先方が悪るからうが喧嘩の相手になるといふ事は無い、謝罪て来い謝罪て来
 い途方も無い奴だと我子を叱りつけて、長吉がもとへあやまりに遣られる事必定
 なれば、三五郎は口惜しさを噛みつぶして七日十日と程をふれば、痛みの場處の癒ると共
 に其うらめしさも何時しか忘れて、頭の家かしらの赤ん坊あかぼうが守りをして二錢せんが駄賃だちんをうれしがり、
 ねん／＼よ、おころりよ、と背負しよひあるくさま、年はと問へば生意氣なまいきざかりの十六にも成
 りながら其大躰そのづうたいを恥はづかしげにもなく、表町へものこくと出かけるに、何時も美登
 利しやうたと太なぶが鬨なぶりものに成つて、お前は性根しやうねを何處へ置いて来たとからかはれながらも
 遊びあその中間なかまは外れはづざりき。
 春は櫻の賑はるひよりかけて、なき玉菊たまぎくが燈籠とうろうの頃ころ、つゞいて秋の新あき仁しん和わ賀がには十分間ぶかんに
 くるまと、このことこのとほの車くるまの飛とぶ事こと此このとほ通りのみにて七十五輛りようと數かずへしも、二の替かわりさへいつしか過すぎて、赤蜻あかとん
 蛉ぼうつんぼ田圃みだに亂みだるれば横堀よこぼりに鶉うづらなく頃ころも近ちかつきぬ、朝夕あさゆふの秋風あきかぜ身みにしみ渡わたりて上じやう清せい

が店の蚊遣香懷爐灰に座をゆづり、石橋の田村やが粉挽く臼の音さびしく、角海
 老が時計の響きもそゞろ哀れの音を傳へるやうに成れば、四季絶間なき日暮里の火の光り
 も彼れが人を焼く烟りかとうら悲しく、茶屋が裏ゆく土手下の細道に落かゝるやうな三
 味の音を仰いで聞けば、仲之町藝者が冴えたる腕に、君が情の假寐の床にと何ならぬ一
 ふし哀れも深く、此時節より通ひ初るは浮かれ浮かるゝ遊客ならで、身にしみ／＼
 と實のあるお方のよし、遊女あがりの去る女が申し、此ほどの事かゝんもくだゝしや大
 音寺前にて珍らしき事は盲目按摩の二十ばかりなる娘かなはぬ戀に不自由なる身を恨
 みて水の谷の池に入水したるを新らしい事とて傳へる位なもの、八百屋の吉五郎に大工
 の太吉がさつぱりと影を見せぬが何とかせしと問ふに此一件であげられましたと、顔の眞
 中へ指をさして、何の子細なく取立て、噂をする者もなし、大路を見渡せば罪なき子供
 の三五人手を引つれて開いらいた開いらいた何の花ひらいたと、無心の遊びも自然と靜かに
 て、廓に通ふ車の音のみ何時に變らず勇ましく聞えぬ。

秋雨しとく降るかと思へばさつと音して運びくる様な淋しき夜、通りすがりの客を
 ば待たぬ店なれば、筆やの妻は宵のほどより表の戸をたて、中に集まりしは例の美登利
 に正太郎、その外には小さき子供の二三人寄りて細螺はじきの幼なげな事して遊ぶほ

どに、美登利ふと耳を立て、あれ誰れか買物に來たのでは無いか溝板を踏む足音がするといへば、おや左様か、己いらは少つとも聞なかつたと正太もちうくたこかいの手を止めて、誰れか中間が來たのでは無いかと嬉しがるに、門なる人は此店の前まで來たりける足音の聞えしばかり夫れよりはふつと絶えて、音も沙汰もなし。

(十一)

正太は潜りを明けて、ばあとと言ひながら顔を出すに、人は二三軒先の軒下をたどりて、ぼつ／＼と行く後影、誰れだ誰れだ、おいお這入よと聲をかけて、美登利が足駄を突かけばきに、降る雨を厭はず駆け出さんとせしが、あゝ彼奴だと一ト言、振かへつて、美登利さん呼んだつても來はしないよ、一件だもの、と自分の頭を丸めて見せぬ。

信さんかへ、と受けて、嫌やな坊主つたら無い、吃度筆か何か買ひに來ただけれど、私たちが居るものだから立聞きをして歸つたのであらう、意地悪るの、根性まがりの、ひねっこびれの、吃りの、齒かけの、嫌やな奴め、這入つて來たら散々／＼と窘めてやる物を、歸つたは惜しい事をした、どれ下駄をお貸し、一寸見てやる、とて正太に代つて

顔かほを出だせば軒のきの雨あまだれ前まへ髪がみに落おちて、おゝ氣味きみが悪わるいと首くびを縮ちぢめながら、四五軒けん先の顔かほがすとうがすとうしただいこくがさかたがさかた瓦斯燈がすとうの下したを大黒傘だいきくがさ肩かたにして少すこしうつむいて居ゐるらしくとほくと歩あゆむ信しん如にょの後ごかげ、何時いつまでも、何時いつまでも、何時いつまでも、見送みおくるに、美登利みどりさん何どうしたの、と正太しやうたは怪あやしがりて背せなか中なかをつゝきぬ。

何どうもしない、と氣きの無ない返事へんじをして、上うへへあがつて細螺きしやごを數かぞへながら、本當ほんたうに嫌いやいな小僧こぞうとつては無ない、表おもて向むきに威張あばつた喧嘩けんくわは出來できもしないで、温順をとなしさうな顔かほばかりして、根性こんじやうがくすくして居ゐるのだもの憎にくくらしからうでは無ないか、家うちの母かさんが言いふて居ゐたつけ、瓦落がらくして居ゐる者は心このころが好いいのだと、夫それだからぐずくして居ゐる信のぶさん何かは心このころが悪わるいに相違さうあない、ねへ正太しやうたさん左様さうであらう、と口くちを極きわめて信しん如にょの事ことを悪わるく言いへば、夫それでも龍華寺りゆうげじはまだ物ものが解わかつて居ゐるよ、長ちやうきち吉きちと來きたら彼あれははやと、生な意まい氣きに大人おとなの口くちを眞ま似ねれば、お廢よしよ正太しやうたさん、子供こどもの癖くせにませた様やうでかしい、お前まへは餘よつほど劇ひやうきん輕きんものだね、とて美登利みどりは正太しやうたの頬ほをつゝいて、其眞面目そのまじめがほはと笑わらひこけるに、己おらだつても最少もすこし經たてば大人おとなになるのだ、蒲田屋かばたやの旦那だんなのやうに角袖かくそで外いとう套なか何なにか着きてね、祖母おばあさんが仕舞しまつて置おく金時計きんどけいを貰もらつて、そして指輪ゆびわもこしらへて、卷煙草まきたばこを吸すつて、履はく物ものは何なにが宜よからうな、己おらは下駄げたより雪駄せつたが好すきだから、三

枚裏まいらにして繻珍しゆちんの鼻緒はなをといふのを履はくよ、似合にあふだらうかと言いへば、美登利みどりはくすく
 笑わらひながら、背せいの低ひくい人が角袖かくそで外套がわいとうに雪駄せつたばき、まあ何どんなにか可笑をかしからう、目めくす
 薬りの瓶びんが歩あるくやうであらうと誹をこすに、馬鹿ばかを言いつて居いらあ、それまでには己おらだつて大
 きく成なるさ、此こんな小ちつぽけでは居いないと威張あるに、夫それではまだ何いつの事ことだか知しれはし
 ない、天てん井じやうの鼠ねづがあれ御覽ごらん、と指ゆびをさすに、筆ふでやの女房つまを始めはじとして座ざにある者ものみな
 笑わらひころげぬ。

正太しょうたは一人眞面目ひとりまじめに成なりて、例れいの目めの玉たまぐるくとさせながら、美登利みどりさんは冗談じやうだん
 にして居ゐるのだね、誰たれだつて大人おとなに成ならぬ者は無ないに、己おらの言いふが何故なぜをかしからう、
 奇麗きれいな嫁よめさんを貰もらつて連れて歩あるくやうに成なるのだがなあ、己おらは何なんでも奇麗きれいのが好すきだか
 ら、煎餅せんべいやのお福ふくのやうな痘痕みづちやづらや、薪まきやのお出額でこのやうなのが萬もし一こ来こようなら、
 直ちさま追出おひだして家うちへは入いれて遣やらないや。己おらは痘痕あばたと濕しつつかきは太だい嫌いひと力ちからを入れる
 に、主人あるじの女をんなは吹出ふきだして、夫それでも正しょうさん宜よく私わたしが店みせへ來きて下くださるの、伯母おばさんの痘痕あばたは
 見みえぬかえと笑わらふに、夫それでもお前まへは年寄としよりだもの、己おらの言いふのは嫁よめさんの事ことさ、年寄としよ
 りは何どうでも宜いいとあるに、夫それは大失敗おほしくじりだねと筆ふでやの女房にようぼうおもしろづくに御機嫌ごきげんを
 取とりぬ。

町内で顔の好いのは花屋のお六さんに、水菓子やの喜いさん、夫れよりも、夫れよりもずんと好いはお前の隣に据つてお出なさるのなれど、正太さんはまあ誰れにしようとも極めてあるえ、お六さんの眼つきか、喜いさんの清元か、まあ何れをえ、と問はれて、しようたかほ、あか、なん、どこ、もの、つ、した、すこ、正太顔を赤くして、何だお六づらや、喜い公、何處が好い者かと釣りらんぷの下を少し居退きて、壁際の方へと尻込みをすれば、それでは美登利さんが好いのであらう、さう極めて御座んすの、と圖星をさゝれて、そんな事を知る物か、何だ其様な事、とくるり後を向いて壁の腰ばりを指でたゝきながら、廻れく、水車を小音に唱ひ出す、美登利は衆人の細螺を集めて、さあ最う一度はじめからと、これは顔をも赤らめざりき。

(十二)

信如が何時も田町へ通ふ時、通らでも事は濟めども言はゞ近道の土手々前に、假初の格子門、のぞけば鞍馬の石燈籠に萩の袖垣しをらしう見えて、縁先に巻きたる簾のさまもなつかしう、中がらすの障子のうちには今様の按察の後室が珠数をつまぐつて、冠つ切りの若紫も立出るやと思はるゝ、その一ツ構へが大黒屋の寮なり。

昨日も今日も時雨の空に、田町の姉より頼みの長胴着が出来たれば、暫時も早う重ねさせたき親心、御苦勞でも學校まへの一寸の間に持つて行つて呉れまいか、定めて花も待つて居ようほどに、と母親よりの言ひつけを、何も嫌やとは言ひ切られぬ温順しさに、唯はいくくと小包みを抱へて、鼠小倉の緒のすがりし朴木齒の下駄ひたくと、信如は雨傘さしかざして出ぬ。

お齒ぐろ溝の角より曲りて、いつも行くなる細道をたどれば、運わるう大黒やの前まで來し時、さつと吹く風大黒傘の上を掴みて、宙へ引あげるかと疑ふばかり烈しく吹けば、これは成らぬと力足を踏こたゆる途端、さのみに思はざりし前鼻緒のずるくと※けて、傘よりもこれこそ一の大事に成りぬ。

信如こまりて舌打はすれども、今更何と法のなければ、大黒屋の門に傘を寄せかけ、降る雨を庇に厭ふて鼻緒をつくるふに、常々仕馴れぬお坊さまの、これは如何な事、心ばかりは急れども、何としても甘くはすげる事の成らぬ口惜しき、ぢれて、ぢれて、袂の中から記事文の下書きして置いた大半紙を掴み出し、ずんくと裂きて紙縷をよるに、意地わるの嵐またもや落し來て、立かけし傘のころころと轉がり出るを、いまくしい奴めと腹立たしげにいひて、取止めんと手を延ばすに、膝へ乗せて置きし小包み意久地もな

く落ちて、風呂敷は泥に、我着る物の袂までを汚しぬ。

見るに毒の氣なるは雨の中の傘なし、途中に鼻緒を踏み切りたるばかりは無し、美登利は障子の中ながら硝子ごしに遠く眺めて、あれ誰れか鼻緒を切つた人がある、母さん切れを遣つても宜う御座んすかと尋ねて、針箱の引出しから反仙ちりめんの切れ端をつかみ出し、庭下駄はくも鈍かしきやうに、馳せ出で、縁先の洋傘さすより早く、庭石の上を傳ふて急ぎ足に來たりぬ。

それと見るより美登利の顔は赤う成りて、何のやうの大事にでも逢ひしやうに、胸の動悸の早くうつを、人の見るかと背後の見られて、恐るゝ門の傍へ寄れば、信如もふつと振り返りて、此れも無言の脇を流るゝ冷汗、跣足に成りて逃げ出したき思ひなり。

平常の美登利ならば信如が難義の體を指さして、あれゝ彼の意久地なしと笑ふて笑ひ抜いて、言ひたいまゝの悪まれ口、よくもお祭りの夜は正太さんに仇をするとして私たちが遊びの邪魔をさせ、罪も無い三ちやんを擲かせて、お前は高見で采配を振つてお出なされたの、さあ謝罪なさんすか、何とで御座んす、私の事を女郎女郎と長吉づらに言はせるのもお前の指圖、女郎でも宜いでは無いか、塵一本お前さんが世話には成らぬ、私には父さんもあり母さんもあり、大黒屋の旦那も姉さんもある、お前の

やうな腥のお世話には能うならぬほどに餘計な女郎呼はり置いて貰ひましょ、言ふ事があらば陰のくすくすならで此處で言いひなされ、お相手には何時でも成つて見せませ、さあ何とで御座んす、と袂を捉らへて捲しかくる勢ひ、さこそは當り難うもあるべきを、物ははず格子のかけに小隠れて、さりとして立去るでも無しに唯うぢくと胸とゞろかすは平常の美登利のさまにては無かりき。

(十三)

此處は大黒屋のと思ふ時より信如は物の恐ろしく、左右を見ずして直あゆみに爲しなれども、生憎の雨、あやにくの風、鼻緒をさへに踏切りて、詮なき門下に紙縷を纏る心地、憂き事さま／＼に何うも堪へられぬ思ひの有しに、飛石の足音は背より冷水をかけられるが如く、顧みねども其人と思ふに、わなくと慄へて顔の色も變るべく、後向きに成りて猶も鼻緒に心を盡すと見せながら、半は夢中に此下駄いつまで懸りても履ける様には成らんともせざりき。

庭なる美登利はさしのぞいて、ゑゝ不器用な彼んな手つきして何うなる物ぞ、紙縷は婆々

縷、藁しべなんぞ前壺に抱かせたとて長もちのする事では無い、夫れく羽織の裾が地
 について泥に成るは御存じ無いか、あれ傘が轉がる、あれを疊んで立てかけて置けば好い
 にと一々鈍かしう齒がゆくは思へども、此處に裂れが御座んす、此裂でおすげなされと呼
 かくる事もせず、これも立盡して降雨袖に託しきを、厭ひもあへず小隠れて覗ひしが、
 さりとも知らぬ母の親はるかに聲を懸けて、火のしの火が熾りましたぞえ、此美登利さん
 は何を遊んで居る、雨の降るに表へ出での悪戯は成りませぬ、又此間のやうに風引
 かうぞと呼立てられるに、はい今行ますと大きく言ひて、其聲信如に聞えしを耻かし
 く、胸はわくわくと上氣して、何うでも明けられぬ門の際にさりとも見過しがたき難義
 をさま／＼の思案盡して、格子の間より手に持つ裂れを物いはず投げ出せば、見ぬやう
 に見て知らず顔を信如のつくるに、ゑゝ例の通りの心根と遣る瀬なき思ひを眼に集め
 て、少し涙の恨み顔、何を憎んで其やうに無情そぶりは見せらるゝ、言ひたい事は此方
 にあるを、餘りな人とこみ上るほど思ひに迫れど、母親の呼聲しばくくなるを詫しく、
 詮方なさに一ト足二タ足ゑゝ何ぞいの未練くさい、思はく耻かすと身をかへして、かた
 くと飛石を傳ひゆくに、信如は今ぞ淋しう見かへれば紅入り友仙の雨にぬれて紅
 葉の形のうるはしきが我が足ちかく散ぼひたる、そゞろに床しき思ひは有れども、手に取

あぐる事をもせず空しう眺めて憂き思ひあり。

わが不器用をあきらめて、羽織の紐の長きをはづし、結びつけにくるくると見とむなき間に合せをして、これならばと踏試るに、歩きにくき事言ふばかりなく、此下駄で田町まで行く事かと今さら難義は思へども詮方なくて立上る信如、小包みを横に二夕足ばかり此門をはなれるにも、友仙の紅葉目に残りて、捨て、過ぐるにしのび難く、心残りして見返れば、信さん何うした鼻緒を切つたのか、其姿は何だ、見ツとも無いなと不意に聲を懸くる者のあり。

おどろ驚いて見かへるに暴れ者の長吉、いま廓内よりの歸りと覺しく、浴衣を重ねし唐棧の着物に柿色の三尺を例の通り腰の先にして、黒八の襟のかゝつた新らしい半天、印の傘をさしかざし高足駄の爪皮も今朝よりとはしるき漆の色、きわ／＼しう見えて誇らし氣なり。

ぼくは鼻緒を切つて仕舞つて何う爲ようかと思つて居る、本當に弱つて居るのだ、と信如の意久地なき事を言へば、左様だらうお前に鼻緒の立ッこは無い、好いや己れの下駄を履て行ねへ、此鼻緒は大丈夫だよといふに、夫れでもお前が困るだらう。何己れは馴れた物だ、斯うやつて斯うすると言ひながら急遽しう七分三分に尻端折て、其様な結び

つげなんぞより是れが爽快だと下駄を脱ぐに、お前跣足に成るのか夫れでは氣の毒だと
 信如困り切るに、好いよ、己れは馴れた事だ信さんなんぞは足の裏が柔らかいから跣足
 で石ごろ道は歩けない、さあ此れを履いてお出で、と揃へて出す親切さ、人には疫病
 神のやうに厭はれながらも毛虫眉毛を動かして優しい詞のもれ出るぞをかしき。信さん
 の下駄は己れが提げて行かう、臺處へ抛り込んで置たら子細はあるまい、さあ履き替へ
 て夫れをお出しと世話をやき、鼻緒の切れしを片手に提げて、それなら信さん行てお出、
 のちに學校で逢はうぜの約束、信如は田町の姉のもとへ、長吉は我家の方へと
 行別れるに思ひの止まる紅入の友仙は可憐しき姿を空しく格子門の外にと止めぬ。

(十四)

このとし
 此年三の酉まで有りて中一日はつづれしかど前後の上天氣に大鳥神社の賑ひすさ
 まじく、此處かこつけに検査場の門より亂れ入る若人達の勢ひとは、天柱くだけ地
 維かくるかと思はるゝ笑ひ聲のどよめき、中之町の通りは俄に方角の替りしやうに思は
 れて、角町京町處々のはね橋より、さつさ押せくと猪牙がゝつた言葉に人

となみ 波を分くる群もあり、河岸の小店の百轉づりより、優にうづ高き大籬の樓上
 まで、絃歌の聲のさま／＼に沸き來るやうな面白さは大方の人おもひ出で、忘れぬ
 物に思すも有るべし。正太は此日日がけの集めを休ませ貰ひて、三五郎が大頭の店
 を見舞ふやら、團子屋の背高が愛想氣のない汁粉やを音づれて、何うだ儲けがあるかえ
 と言へば、正さんお前好い處へ來た、おれが餡この種なしに成つて最う今からは何を賣ら
 う、直様煮かけては置いたけれど中途お客は斷れない、何うしような、と相談を懸け
 られて、智恵無しの奴め大鍋の四邊に夫れツ位無駄がついて居るでは無いか、夫れへ湯
 を廻して砂糖さへ甘くすれば十人前や二十人は浮いて來よう、何處でも皆な左様するのだ
 お前の店ばかりではない、何此騒ぎの中で好悪を言ふ物が有らうか、お賣りお賣りと
 言ひながら先に立つて砂糖の壺を引寄せれば、目ツかちの母親おどろいた顔をして、お
 前さんは本當に商人に出來て居なさる、恐ろしい智恵者だと賞めるに、何だ此様な事が
 智恵者な物の、今横町の潮吹きの處で餡が足りないツて此様やつたを見て來たので己れの
 發明では無い、と言ひ捨て、お前は知らないか美登利さんの居る處を、己れは今朝か
 ら探して居るけれど何處へ行たか筆やへも來ないと言ふ、廓内だらうかなと問へば、む、
 美登利さんはな今の先己れの家の前を通つて揚屋町の芻橋から這入つて行た、本當に

正さん大變だぜ、今日はね、髪を斯ういふ風にこんな島田に結つてと、變てこな手つきをして、奇麗だね彼の娘はと鼻を拭つゝ言へば、大卷さんより猶美しいや、だけれど彼の子も華魁に成るのでは可憐さうだと下を向ひて正太の答ふるに、好いじやあ無いか華魁になれば、己れは來年から際物屋に成つてお金をこしらへるがね、夫れを持つて買ひに行くのだと頓馬を現はすに、洒落くさい事を言つて居らあ左すればお前はきつと振られるよ。何故々々何故でも振られる理由が有るのだものと、顔を少し染めて笑ひながら、夫れじやあ己れも一廻りして來ようや、又後に來るよと捨て臺辭して門に出て、十六七の頃までは蝶よ花よと育てられ、と怪しきふるへ聲に此頃此處の流行ぶしを言つて、今では勤めが身にしみてと口の内にくり返し、例の雪駄の音たかく浮きたつ人の中に交りて小さき身躰は忽ちに隠れつ。

揉まれて出し廓の角、向ふより番頭新造のお妻と連れ立ちて話しながら來るを見れば、まがひも無き大黒屋の美登利なれども誠に頓馬の言ひつる如く、初々しき大島田結ひ錦のやうに絞りばなしふさふさ〜とかけて、鼈甲のさし込、總つきの花かんざしひらめかし、何時よりは極彩色のたゞ京人形を見るやうに思はれて、正太はあつとも言はず立止まりしまゝ、例の如くは抱きつきもせで打守るに、彼方は正太さんかとして走り

寄り、お妻つまどんお前まへ買かひ物が有あらば最もう此こゝ處ゝでお別わかれにしましよ、私わたしは此この人ひとと一しよ處かへに歸かへります、左さやう様やうならとて頭かしらを下さげげるに、あれ美みいちゃんの現げん金きんな、最もうお送おくりは入いりませぬとかえ、そんなら私わたしは京きやう町まちで買かい物ものしましよ、とちよこゝ走ばしりに長なが屋やの細ほそ道みちへ驅かけ込こむに、正しよう太たはじめて美み登どり利りの袖そでを引ひいて好よく似に合あふね、いつ結ゆつたの今け朝さかへ昨日きのふかへ何な故げはやく見みせては呉くれなかつた、と恨うらめしげに甘あまゆれば、美み登どり利り打うちしほれて口くち重おもく、姉ねえさんの部へ屋やで今け朝さ結ゆつて貰もらつたの、私わたしは厭いややでしょうが無ない、とさし俯うつ向むきて往ゆ來きを恥はぢぬ。

(十五)

憂うく恥はづかしく、つゝましき事こと身みにあれば人ひとの褒ほめるは嘲あざけと聞きなされて、嶋しま田だの鬻まげなつかしさに振ふりかへり見みる人ひとたちをば我われれを蔑さげすめ眼めつきと察とられて、正しよう太たさん私わたしは自じ宅たくへ歸かへるよと言いふに、何な故げ今け日ふは遊あそばないのだらう、お前まへ何なにか小こ言ごを言いはれたのか、大おほ卷まきさんと喧けん嘩くわでもしたのでは無ないか、と子こ供どもらしい事ことを問とはれて答こたへは何なんと顔かほの赤あかむぼかり、連つれ立だちて團だん子ご屋やの前まへを過すぎるに頓とん馬まは店みせより聲こゑをかけてお中なかが宜よろしう御ご座ざいますと仰げうさ

山な言葉ことばを聞くより美登利みどりは泣なきたいやうな顔かほつきして、正太しょうたさん一處しよに來きては嫌いややだよと、置おきざりに一人足ひとりあしを早はやめぬ。

お西とりさまへ諸共もろともにと言いひしを道引みちひきたが違たがへて我が家わがやの方かたへと美登利みどりの急いそぐに、お前一處まへしよに來きて呉くれないのか、何故なぜ其方そつちへ歸かへつて仕舞しまふ、餘あまりだぜと例れいの如ごとく甘あまへてかゝるを振切ふりきるやうに物言ものいはず行ゆけば、何なんの故ゆゑとも知らねども正太しょうたは呆あきれて追おひすがり袖そでを止とどめては怪あやしがるに、美登利みどり顔かほのみ打うち赤あかめて、何なんでも無ない、と言いふ聲理こゑわけ由よしあり。

寮りようの門もんをばくざり入いるに正太しょうたかねても遊あそびに來き馴なれて左さのみ遠慮ゑんりよの家いへにもあらねば、跡あとより續つづいて縁ゑん先さきからそつと上あがるを、母親は、おや見るより、お、正太しょうたさん宜よく來きて下くださつた、今朝けさから美登利みどりの機嫌きげんが悪わるくて皆みんななあくねて困こまつて居あます、遊あそんでやつて下くだされと言いふに、正太しょうたは大人おとならしい惶かしこまりて加か※げんが悪わるいのですかと眞面目まじめに問とふを、いゝゑ、と母親は、おや怪あやしき笑顔ゑがほをして少すこし經たてば愈なほりませう、いつでも極きまりの我わがまゝ様さん、嗚さぞお友達ともだちとも喧嘩けんかしませうな、眞實ほんにやり切きれぬ嬢ぢやうさまではあるとて見みかへるに、美登利みどりはいつか小座こざ敷しきに蒲團ふとん抱かいませう、帯おびと上着うわぎを脱ぬぎ捨すてしばかり、うつ伏ふし臥ふして物ものをも言いはず。正太しょうたは恐おそるゝ枕まくらもとへ寄よつて、美登利みどりさん何どうしたの病氣びやうきなのか心持こゝろもちが悪いのか全體ぜんたい何どうしたの、と左さのみは摺寄すりよらず膝ひざに手てを置おいて心こゝろばかりを腦なやますに、美登利みどりは

更に答へも無く押ゆる袖にし**のび音の涙**、まだ**結びこめぬ前髪**の毛の濡れて見ゆるも子細ありとはしるけれど、子供心に**正太は何と慰め**の言葉も出ず唯ひたすらに困り入るばかり、全體何が何うしたのだらう、己れはお前に怒られる事はしもしないに、何が其様な**腹が立つ**の、と覗き込んで**途方にくる**れば、美登利は眼を拭ふて**正太さん**私は怒つて居るのでは有りません。

夫れならどうしてと問はれ、ば憂き事さまぎま是れは何うでも話しのほかの包ましさなれば、誰れに**打明けいふ筋**ならず、物言はずして自づと**頬の赤う**なり、さして何とは言はれねども次第々々に**心細き**思ひ、すべて**昨日の美登利の身**に覺えなかりし思ひをまうけて物の恥かしさ言ふばかり無く、成る事ならば**薄暗き部屋**のうちに誰れとて言葉をかけもせず我が顔ながむる者なしに**一人氣まゝの朝夕**を経たや、さらば此様の憂き事ありとも人目つゝ**ましからず**は斯くまで物は思ふまじ、何時までも何時までも**人形と紙雛**好とを相手にして**飯事**ばかりして居たらば**嘸かし嬉しき事**ならんを、ゑゝ厭やく、大人に成るは厭やな事、何故此やうに年をば取る、最う**七月十月**、一年も以前へ歸りたいにと老人じみた考へをして、**正太**の此處にあるをも思はれず、物いひかければ悉く蹴ちらして、歸つてお呉れ**正太さん**、後生だから歸つてお呉れ、お前が居ると私は死んで仕舞ふ

であらう、物を言はれると頭痛がする、口を利くと目がまわる、誰れもく私の處へ来ては厭やなれば、お前も何卒歸つてと例に似合ぬ愛想づかし、正太は何故とも得ぞ解きがたく、畑のうちにあるやうにてお前は何うしても變てこだよ、其様な事を言ふ筈は無いに、可怪しい人だね、と是れはいさゝか口惜しき思ひに、落つて言ひながら目には氣弱の涙のうかぶを、何とて夫れに心を置くべき歸つてお呉れ、歸つてお呉れ、何時まで此處に居て呉れ、ば最うお朋達でも何でも無い、厭やな正太さんだと憎くらしげに言はれて、夫れならば歸るよ、お邪魔さまで御座いましたとて、風呂場に加※見る母親には挨拶もせず、ふいと立つて正太は庭先よりかけ出しぬ。

(十六)

眞一文字に驅けて人中を抜けつ潜りつ、筆屋の店へをどり込めば、三五郎は何時か店をば賣仕舞ふて、腹掛のかくしへ若干金ををぢやらつかせ、弟妹引つれつ、好きな物をば何でも買への大兄様、大愉快の最中へ正太の飛込み來しなるに、やあ正さん今お前をば探して居たのだ、己れは今日は大分の儲けがある、何か奢つて上やうかと言へ

ば、馬鹿をいへ手前に奢つて貰ふ己れでは無いわ、黙つて居ろ生意氣は吐くなど何時にな
 く荒らしい事を言つて、夫れどころでは無いとて鬱ぐに、何だ何だ喧嘩かと飯べかけの餡
 ぱんを懷中に捻ぢ込んで、相手は誰れだ、龍華寺か、長吉か、何處で始まつた廓内
 は鳥居前か、お祭りの時とは違ふぜ、不意でさへ無くは負けはしない、己れが承知だ
 先棒は振らあ、正さん膽ツ玉をしつかりして懸りねへ、と競ひかゝるに、ゑゝ氣の早い
 奴め、喧嘩では無い、とて流石に言ひかねて口を噤めば、でもお前が大層らしく飛込ん
 だから己れは一途に喧嘩かと思つた、だけれど正さん今夜はじまらなければ最う是れか
 ら喧嘩の起りツこは無いね、長吉の野郎片腕がなくなる物と言ふに、何故どうして片
 腕がなくなるのだ。お前知らずか己れも唯今うちの父さんが龍華寺の御新造と話して居
 たを聞いたのだが、信さんは最う近々何處かの坊さん學校へ這入るのだとさ、衣を着
 て仕舞へば手が出ねへや、唐つきり彼んな袖のぺらくした、恐ろしい長い物を捲り上る
 のだからね、左うなれば來年から横町も表も残らずお前の手下だよと煽すに、廢して呉
 れ二錢貫ふと長吉の組に成るだらう、お前みたやうのが百人中間に有たとて少とも嬉しい
 事は無い、着きたい方へ何方へでも着きねへ、己れは人は頼まない眞の腕ツこで一度龍華
 寺とやりたかつたに、他處へ行かれては仕方が無い、藤本は來年學校を卒業して

から行くのだと聞いたが、何うして其様に早く成つたらう、爲様のない野郎だと舌打ちしながら、夫れは少しも心に止まらねども美登利が素振のくり返されて正太は例の歌も出ず、大路の往來の夥たゞしきさへ心淋しければ賑やかなりとも思はれず、火ともし頃より筆やが店に轉がりて、今日の酉の市目茶々々に此處も彼處も怪しき事成りき。美登利はかの日を始めてして生れかはりし様の身の振舞、用ある折は廓の姉のもとにこそ通へ、かけても町に遊ぶ事をせず、友達さびしがりて誘ひにと行けば今に今にと空約束はてし無く、さしにも中よし成けれど正太とさへに親します、いつも耻かし氣に顔のみ赤めて筆やの店に手踊の活潑さは再び見るに難く成ける、人は怪しがりて病ひの故かと危ぶむも有れども母親一人ほゝ笑みては、今にお侠の本性は現れます、これは中休みと子細ありげに言はれて、知らぬ者には何の事とも思はれず、女らしい温順しう成つたと褒めるもあれば折角の面白い子を種なしにしたと諍るもあり、表町は俄に火の消えしやう淋しく成りて正太が美音も聞く事まれに、唯夜なくの弓張提燈、あれは日がけの集めとするく土手を行く影ぞろ寒げに、折ふし供する三五郎の聲のみ何時に變らず滑稽では聞えぬ。

龍華寺の信如が我が宗の修業の庭に立出る風説をも美登利は絶えて聞かざりき、有

し意地いぢをば其そのまゝに封ふうじ込こめて、此處こゝしばらくの怪あやしの現象さまに我われれを我われれとも思おもはれず、
 唯何事たゞなにごとも耻はづかしようのみ有ありけるに、或ある霜しもの朝水あさすいせん仙せんの作り花つくばなを格子門かうしもんの外そとよりさし入い
 れ置おきし者の有ありけり、誰だれの仕業しわざと知るよし無なけれど、美登利みどりは何ゆゑとなく懐なつかしき思おも
 ひにて違ちがひ柵だなの一輪りんざしに入れて淋さびしく清きよき姿すがたをめでけるが、聞きくともなしに傳つたへ聞きく其その
 明あけの日は信しん如にが何なにがしの學林がくりんに袖そでの色いろかへぬべき當たうじつ日じつなりしとぞ(終をわり)

青空文庫情報

底本：「文藝俱樂部第二卷第五編」博文館

1896 (明治29) 年4月

初出：(一) ∼ (三) 「文學界 二十五號」文學界雜誌社

1895 (明治28) 年1月30日

(四) ∼ (六) 「文學界 二十六號」文學界雜誌社

1895 (明治28) 年2月28日

(七) ∼ (八) 「文學界 二十七號」文學界雜誌社

1895 (明治28) 年3月30日

(九) ∼ (十) 「文學界 三十二號」文學界雜誌社

1895 (明治28) 年8月30日

(十一) ∼ (十二) 「文學界 三十五號」文學界雜誌社

1895 (明治28) 年11月30日

(十三) ∼ (十四) 「文學界 三十六號」文學界雜誌社

1895 (明治28) 年12月30日

(十五) ～ (十六) 「文學界 三十七號」 文學界雜誌社

1896 (明治29) 年1月30日

※「夫《それ》」と「夫《そ》れ」、 「祭《まつり》」と「祭《まつ》り」の混在は、底本通りです。

※「萬燈」と「万燈」、「愛嬌」と「愛敬」、「島田」と「嶋田」、「構」と「搆」、「恥」と「耻」、「拔」と「※[#「拔」の「友」に代えて「ノ／友」、U+39DE]」の混在は、底本通りです。

※初出時の署名は、「樋口一葉女史」です。

※変体仮名は、通常の仮名で入力しました。

入力：万波通彦

校正：猫の手びい

2018年4月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

たけくらべ

樋口一葉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>